

## シビックプライドと環境要因が大学生のUターン意向に与える影響

- 金沢工業大学に在学する大学生を対象として -

### Effects on Civic Pride and Environmental Factors on University Students' U-Turn Intention

- Focusing on University Students Enrolled at the Kanazawa Institute of Technology -

森 豪大\*・藪谷 祐介\*\*・春木 孝之\*\*\*

Godai Mori\*, Yusuke Yabutani\*\*, Takayuki Haruki\*\*\*

Civic pride is the pride of the citizens of a city and is based on a sense of ownership to improve the community. In Japan, where the population is declining, civic pride has been attracting attention as a clue to increasing the number of U-turns. We investigated the degree of civic pride in one's hometown, and how awareness of various environmental factors affects the formation of the intention to make a U-turn. The results of a random forest revealed that, first, the existence of a desired job in the local area, second, the desire to continue living in the local area, and third, the desire to live near family and friends in the local area are important for the formation of U-turn intention among university students.

**Keywords:** Place Attachment, Population Decline, Regional University, Machine Learning, Random Forest

地域愛着, 人口減少, 地方大学, 機械学習, ランダムフォレスト

## 1. はじめに

### 1.1. 研究背景と目的

近年, 日本の地方都市<sup>注1)</sup>の多くで人口減少が進んでいる。人口減少が進む地方都市においては, 地域社会の担い手が減少するだけでなく, 消費市場及び地域の経済が縮小するなど, 様々な社会的・経済的な課題が生じる。人口減少が地域経済の縮小を呼び, 更に人口減少を加速させるという負のスパイラルに陥ると国は指摘している<sup>1)</sup>。

まち・ひと・しごと創生総合戦略<sup>2)</sup>において地方都市の人口減少を緩和する方策として, Uターン<sup>注2)</sup>を促進する多様な施策が取り組まれている。例えば, 東京圏在住の地方都市出身の大学生等のUターンを促進するために, 地元企業でのインターンシップ行う「地方創生インターンシップ」を推進している<sup>3)</sup>。Uターンする時期は, 大学を卒業し就職するタイミングが最も多い<sup>4)</sup>。そのため, 地方都市の人口減少を緩和するためには, 地方都市出身の大学生のUターンを促進する方策が有効であると考えられる。

近年, 各自治体のシティプロモーション指針<sup>注3)</sup>において, Uターン人口を増やす方策として, シビックプライドの醸成が重要であるとされている。シビックプライドは, 都市に対する市民の誇りと定義され, 自分自身が関わって地域を良くするための当事者意識に基づく自負心という意味を含んでいる<sup>5)</sup>。また, シビックプライドは「地域参画」, 「地域アイデンティティ」, 「忠誠的愛郷心」, 「地域愛着」の4つの要素で構成されている<sup>6)</sup>。小浜ら<sup>7)</sup>は, 地域愛着が大学生のUターン意向を形成することを指摘しており, 地域外へ流出した大学生がUターンを考える際に地元に対するシビックプライドが影響すると思われる。しかし, 実際のUターン決定には, シビックプライドなどの心理的要因だけでなく, 地元での住環境や就職先, 育児環境など様々

な要素が複合的に影響する<sup>8)</sup>。本研究では, 心理的要因以外の生活環境や都市環境, 労働環境を環境要因と定義する。大学生の地元へのシビックプライドと環境要因がUターン意向に与える影響を統合的に分析することにより, それらの要因のうちどの要素が強く影響するかを明らかにすることができるため, Uターン人口の増加を狙う行政施策を検討する上で有用な知見を得られると期待される。さらに, 学年や出身地等の属性との関係を分析することにより, ターゲットに応じたさらなる詳細な検討が可能となる。

そこで本研究では, 大学生の地元へのシビックプライドと環境要因がUターン意向の形成にどのような影響があるか, さらにはそれらの影響が属性によりどのように異なるかを明らかにすることを目的とする。

### 1.2. 既往研究の整理

Uターン意向やシビックプライドに関する研究は, これまでにも多数行われてきた。Uターン決定の要因に関する研究として, 岡崎ら<sup>9)</sup>は, 中山間地域におけるUターン者増加の要因は, 村民の交流・活動の活発度合いや家族・親戚の存在, 就職先の有無, 伝統文化に対する意識の高さであることを指摘している。また, 小浜ら<sup>7)</sup>はUターン意向が高い地方都市出身の大学生は, 地元への危機意識と愛着を持っていることを明らかにしている。また, 林<sup>10)</sup>は, 長子ほどUターン率が高いこと, Uターン者は親との同居率が高いことなど, Uターンには家庭に関する事柄が大きく影響することを指摘している。江崎ら<sup>11)</sup>は, Uターン決定の際の障害として, 自分にあった職種の不足や収入の低下など, 仕事にまつわる様々な難点を指摘している。これらの研究は, Uターン決定の要因や特徴, 障害を明らかにしたものであるが, シビックプライドと環境要因を統合的に分析したものは見られない。

\*学生会員 富山大学大学院 人文社会芸術総合研究科 (Grad. Sch. of Humanities, Arts, and Social Sci., University of Toyama)

\*\*正会員 富山大学 学術研究部 芸術文化学系 (Faculty of Art and Design, University of Toyama)

\*\*\*非会員 富山大学 学術研究部 都市デザイン学系 (Faculty of Sustainable Design, University of Toyama)

シビックプライドに関する研究として、伊藤<sup>9)</sup>はシビックプライド尺度を体系的にまとめ、アンケート調査により市民の都市環境への評価がシビックプライドにどう影響するかを明らかにしている。なお、本研究におけるシビックプライド尺度は伊藤<sup>9)</sup>のものを参考に作成した。さらに、伊藤<sup>12)</sup>は、具体的な都市環境を含めた源泉とシビックプライドとの関係を明らかにしている。森ら<sup>13)</sup>は高校生においてシビックプライドの醸成が将来の定住意識を高めることを明らかにしている。日高ら<sup>14)</sup>は、看護学の視点から中山間地域の住民を対象に、地域活動の参加意欲形成にシビックプライドが影響していることを明らかにしている。井形ら<sup>15)</sup>は、小中学生への地域教育がシビックプライドの醸成に影響することを明らかにしている。これらの研究はシビックプライドの尺度の開発、あるいは、小中学生や高校生、中山間地域の住民を対象としたシビックプライドの醸成要因や醸成による効果を明らかにした研究であるが、Uターン施策を検討する上で有用であると考えられる大学生を対象としたシビックプライドに関する研究は見られない。

本研究は、卒業後にUターンを期待できる大学生を対象に、Uターン意向の形成における地元へのシビックプライドと環境要因を統合的に分析するものであり、その点において新規性を有し、大学生の卒業時のUターンを促進するためにどのような施策に優先的に取り組むことが有効かを検討する上で有用な知見を得られる点において社会的意義を有する。

### 1.3. 研究対象

本研究では、金沢工業大学に在学する学部学生及び修士学生（以下、これらを合わせて大学生とする）を対象に調査を行った。金沢工業大学は石川県に本部を置き、工学部や情報フロンティア学部、建築学部、バイオ・化学部を有する理工学系の私立大学である。大学生数は令和4年5月1日時点で6,763人である<sup>16)</sup>。在学する学部学生の内、北陸出身者が44.9%と半数近くを占め、その中でも石川県出身者が最も多く、富山県出身者、福井県出身者と続く。北陸地域以外では、東海や甲信越地域出身者が多い。地元と大学時代の居住地がどちらも北陸地域内と近接している大学生が多いため、シビックプライドと環境要因との関係を分析する上で重要なUターン意向が高い大学生が多いことが推察される。加えて、北陸地域出身者と北陸地域外出身者が同程度の割合で在学しているため、2地域の比較を行うことができる。さらに、学年によって職業観の形成度合いが異なることから<sup>17)</sup>、Uターン意向の形成要因も異なると考えられるが、各学年の差異を分析するためには、学部1年生から修士2年生を対象に調査を行う必要がある。金沢工業大学は理工学系の大学であり、修士学生も比較的多く在学していることから、学年による差異を検討する上で妥当である。以上の理由より、本研究対象を選定した。

## 2. 研究方法

### 2.1. アンケート調査

大学生のUターン意向とシビックプライド及び環境要因の傾向を捉えるために、アンケート調査を実施した。表1にアンケート調査の概要を示した。アンケート調査は、金沢工業大学に在学する学部1年生から修士2年生を対象とした。実施方法は、調査会社<sup>18)</sup>が運営する金沢工業大学の大学生のみがアクセスできるWEBサイトにアンケートを配信し実施した。主な調査項目は、①属性（性別、学年、高校時代の居住都道府県<記述式>）、②Uターン意向、③シビックプライド尺度、④環境要因に対する意識である。

②Uターン意向を測るために「就職先の予定」と質問を設定し、回答の選択肢は「出身市町村及びその周辺地域に就職する」・「出身市町村及びその周辺地域以外に就職する」・「進学等」の3つとした。なお、本研究では、「出身市町村及びその周辺地域に就職する」と回答した者をUターン意向が高い、「出身市町村及びその周辺地域以外に就職する」と回答した者をUターン意向が低いとし、「進学等」は分析対象外とした。③シビックプライド尺度の項目は伊藤<sup>9)</sup>の研究を参考に、④環境要因に対する意識の設定は岡崎ら<sup>9)</sup>、谷垣ら<sup>18)</sup>を参考に作成した。③シビックプライド尺度と④環境要因に対する意識の項目は、各項目に対して5件法（あてはまる・ややあてはまる・どちらでもない・あまりあてはまらない・あてはまらない）のリッカート尺度で回答を得た。リッカート尺度を順序尺度と間隔尺度のどちらに分類するかについて、Carifio & Perla<sup>19)</sup>はリッカート尺度を間隔尺度としてみなしてよいとした。そのため、本研究では5件法の回答を間隔尺度とみなした。

回答数は全体で666件であった。その後、回答の精度を向上させるためにデータスクリーニングを行った。データスクリーニングは、①属性の「高校時代の居住都道府県<記述式>」に対して都道府県以外のものを記入しているものを削除した。さらに、分析対象外である②Uターン意向の「就職先の予定」にて「進学等」と回答したものを削除した。その結果、分析対象サンプル数は477件（全回答のうち71.6%）であった。

### 2.2. ランダムフォレスト

シビックプライドと環境要因がUターン意向に与える影響を明らかにするため、アンケート調査結果を用いてランダムフォレストを行った。なお、本研究の統計分析にはR (version 4.2.2) を用いた。

機械学習の一種であるランダムフォレストとは、データの特徴量（説明変数）をランダムに選択して決定木を構築する処理を複数回繰り返す、各決定木の推定結果の多数決によって分類を行う手法である。なお、決定木とは目的変数が判明しているデータを用いて説明変数のある基準にし

表1 アンケート調査の概要

調査期間	2022年10月13日から2022年10月27日
調査対象	金沢工業大学に在学する学部1年生から修士2年生
実施方法	調査会社 <sup>18)</sup> に調査を依頼し、WEBサイト上に配信し、実施
調査項目	①属性（性別・学年・高校時代の居住都道府県<記述式>）、 ②Uターン意向、③シビックプライド尺度、 ④環境要因に対する意識
回答数	回答数：666件 分析対象サンプル数：477件（回答数のうち71.6%）

たがって分類する方法である。ランダムフォレストにより、シビックプライドと環境要因の各項目の U ターン意向形成に対する変数重要度を明らかにした。変数重要度とは、分類をした際にどれだけ目的変数が分類されず不純なものが混ざっているかという指標であるジニ不純度をいかに下げられるかという数値である。本研究では群間・調査項目間の比較を行うため、変数重要度の総和で各説明変数の変数重要度を除して 0~1 の範囲に正規化したものを変数重要度として扱う。これにより、U ターン意向形成にシビックプライドと環境要因のどの項目がどれくらい重要かを明らかにすることができる。また、各学年、各出身地域でランダムフォレストを行い、変数重要度の違いを明らかにした。

### 3. 属性と U ターン意向

#### 3.1. 属性と U ターン意向の単純集計

回答者の属性と U ターン意向との傾向を明らかにするためにそれらの単純集計を行った。江崎<sup>20)</sup>は、出身地によって U ターン率が異なることを示しており、本研究では、出身地域として北陸地域出身者と北陸地域外出身者間、三大都市圏<sup>21)</sup>出身者と地方都市出身者間の比較を行った。

図 1 にアンケート調査の単純集計を示した。「i. 性別の単純集計」より男性は 73.0%、女性は 25.8%、その他と回答した者は 1.3%であった。母集団である金沢工業大学の男性の割合は 86.7%、女性の割合は 13.3%であり、母集団と比較し、若干女性の割合が大きいものの、母集団の傾向をある程度捉えていると判断した。

表2 シビックプライド尺度と平均値

シビックプライド尺度	平均値
1. 地元は住みやすいと思う	3.97
2. 地元が好きだ	4.16
3. 地元の雰囲気や土地柄が気に入っている	4.08
4. 地元で自分の居場所はない(逆転項目)	4.05
5. 地元ですっと住み続けたい	3.23
6. 地元は大切だと思う	4.24
7. 地元についてまでも変わって欲しくないものがある	3.72
8. 地元になくなってしまおうと悲しいものがある	3.83
9. 地元は、他のほとんどの地域より良い場所である	3.42
10. 地元を批判している人がいたら、地元を擁護する	3.24
11. 友人や家族に地元の商品や製品を使うよう勧める	2.75
12. 地元のスポーツチームを積極的に応援する	2.75
13. 地域社会の一員としての責任を真剣に考えている	2.89
14. 自分のような人間が地域社会で重要な役割を果たすと思う	2.71
15. 地域社会を良い場所にするための自分なりの貢献ができている	2.68
16. 自分は地域社会に変化を起こすことができると思う	2.61
17. 人生の大部分が地元に関わっている	3.23

Note. 平均値の算出には、シビックプライド尺度の回答を用いた。「あてはまる」を5、「ややあてはまる」を4、「どちらでもない」を3、「あまりあてはまらない」を2、「あてはまらない」を1と変換して、各尺度において平均値を算出した。

表3 環境要因の項目と平均値

環境要因	平均値
1. 地元には希望する仕事がある	2.95
2. 地元では満足いく収入が得られる	2.84
3. 地元は教育・子育て環境が整っている	3.43
4. 地元には医療のアクセスが良い	3.45
5. 地元には豊かな自然がある	4.16
6. 地元には地域固有の祭や伝統文化がある	3.95
7. 地元には娯楽施設が整っている	2.88
8. 地元は治安が良い	3.93
9. 地元は景観・静けさなどの住環境が良い	3.97
10. 地元は生活・交通の便が整っている	3.04
11. 地元にいる家族や友人の近くに住みたい	3.46

Note. 平均値の算出には、環境要因の項目の回答を用いた。「あてはまる」を5、「ややあてはまる」を4、「どちらでもない」を3、「あまりあてはまらない」を2、「あてはまらない」を1と変換して、各尺度において平均値を算出した。

「ii. 出身地域の単純集計」より、北陸地域出身者は 49.8%、東海地域出身者は 15.1%、甲信越地域出身者は 14.5%の順で多かった。なお、石川県出身者は 29.8%、富山県出身者は 14.5%、福井県出身者は 5.5%であった。母集団である金沢工業大学は北陸地域出身者が 44.9%、東海地域出身者が 15.5%、甲信越地域が 15.3%と本研究で得た標本と比較的近い傾向である。

「iii. 出身都市圏の単純集計」より、三大都市圏出身者は 23.5%、地方都市出身者は 76.5%と、地方都市出身者が多く在学していることが分かった。

「iv. U ターン意向の単純集計」より、U ターン意向が高い大学生は 48.0%、U ターン意向が低い大学生 52.0%と割

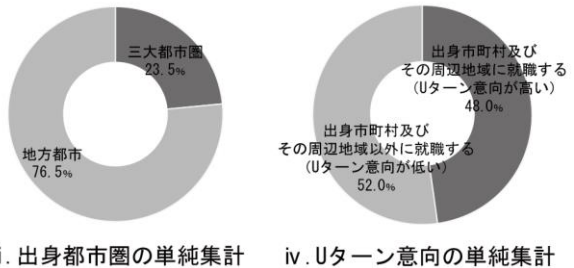
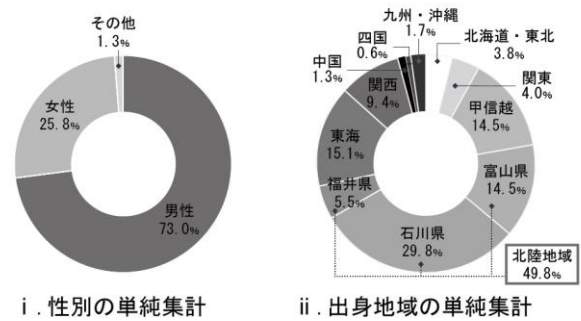


図1 アンケート調査の単純集計

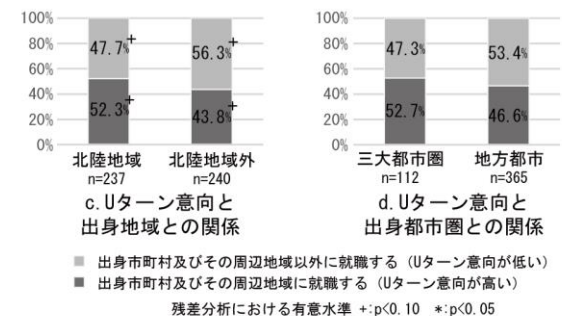
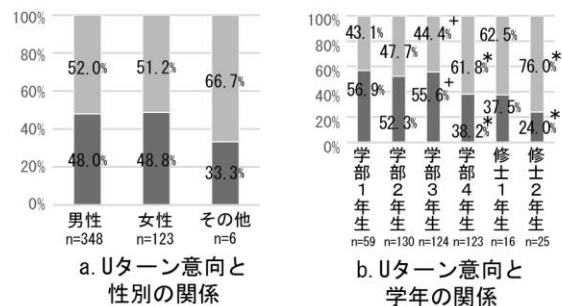


図2 アンケート調査のクロス集計

合が同程度であることが分かった。

### 3.2. 属性とUターン意向の関係

属性とUターン意向との関係を分析するために、クロス集計表を作成し、カイ2乗検定と残差分析を行い、その結果を図2に示した。「b.Uターン意向と学年の関係」についてカイ2乗検定を行った結果、 $\chi^2=16.902$ ,  $p<0.01$ となり有意差が見られた。残差分析の結果、Uターン意向について学部4年生と修士2年生は低いこと ( $p<0.05$ )、学部3年生は高い傾向 ( $p<0.10$ ) が確認された。全体として、学部3年生以下はUターン意向が比較的高く、学部4年生以上はUターン意向が低い傾向が見られた。

「c.Uターン意向と出身地域との関係」についてカイ2乗検定を行った結果、 $\chi^2=3.174$ ,  $p<0.10$ となり有意な傾向が見られた。残差分析の結果、Uターン意向について北陸地域出身者は高い傾向 ( $p<0.10$ )、北陸地域外出身者は低い傾向 ( $p<0.10$ ) が見られた。

一方、「a.Uターン意向と性別の関係」、「d.Uターン意向と出身都市圏との関係」のカイ2乗検定では有意な結果とならず、各変数に有意差が見られなかった。したがって、性別、出身都市圏はUターン意向に影響しないという結果となった。

## 4. シビックプライドと環境要因

### 4.1. シビックプライドの単純集計

表2にシビックプライド尺度とその平均値を示した。地元へのシビックプライドの平均値が最も高いものは「6. 地元は大切だと思う (4.24)」であり、次に「2. 地元が好きだ (4.16)」、「3. 地元の雰囲気や土地柄が気に入っている (4.08)」が続いた。地元への愛着意識が高いことがうかがえる。一方、平均値が最も低い項目は「16.自分には地域社会に変化を起こすことができると思う (2.61)」であり、「15.地域社会を良い場所にするための自分なりの貢献ができて (2.68)」、「14.自分のような人間が地域社会で重要な役割を果たすと思う (2.71)」と続いた。地域社会への意識や役割が低いことは、大学生が社会に出ていないことが影響していると推察される。

### 4.2. 環境要因の単純集計

表3に環境要因の項目と平均値を示した。環境要因への意識の中で最も平均値が高かった項目は、「5. 地元には豊かな自然がある (4.16)」,次に「9. 地元は景観・静けさなどの住環境が良い (3.97)」、「6. 地元には地域固有の祭や伝統文化がある (3.95)」と続いた。一方、平均値が最も低い項目は、「2. 地元では満足いく収入が得られる (2.84)」であり、「7. 地元には娯楽施設が整っている (2.88)」、「1. 地元には希望する仕事がある (2.95)」と続いた。回答者の地元は自然豊かで住環境が良く、伝統文化が残る一方、遊ぶ場所、大学生が希望する仕事が少ない地域であることが推察される。これは、回答者に三大都市圏出身者が少ないことが影響していると考えられる。

### 4.3. 出身地域とシビックプライド・環境要因との関係

出身地域とシビックプライド及び環境要因との関係を明らかにするために、出身地域別のシビックプライド尺度と環境要因の平均値を算出し、その差を見るためにt検定を行った。その結果を図3に示した。なお、出身地域別に分割した各項目の回答は対応のないデータであるため、検定方法はウェルチのt検定を採用した (有意水準  $p<0.05$ )。「人生の大部分が地元に関わっている」と「地元は治安が良い」の項目は北陸地域出身者の平均値が有意に高かった。

「人生の大部分が地元に関わっている」が北陸地域出身者の方が有意に高いことは、大学が地元に近いこと、大学進学後も地元で過ごしたり、関わったりする機会が北陸地域外出身者と比較して多く、そのことが影響していると推察される。

一方、北陸地域外出身者は「地元は生活・交通の便が整っている」が高く、北陸出身者と比較し、より都市化が進行した地域が地元であると推察される。また、「地元のスポーツチームを積極的に応援する」も高いが、これは、都市部に拠点を置くプロ・スポーツチームが多い<sup>2)</sup>ことから、より都市化が進行した北陸地域外出身者の地元でそうしたプロ・スポーツチームが多いことが影響している可能性がある。加えて、近年ではインターネットでスポーツ観戦できるサービスが普及し、居住地域に限らず地元のスポーツチ

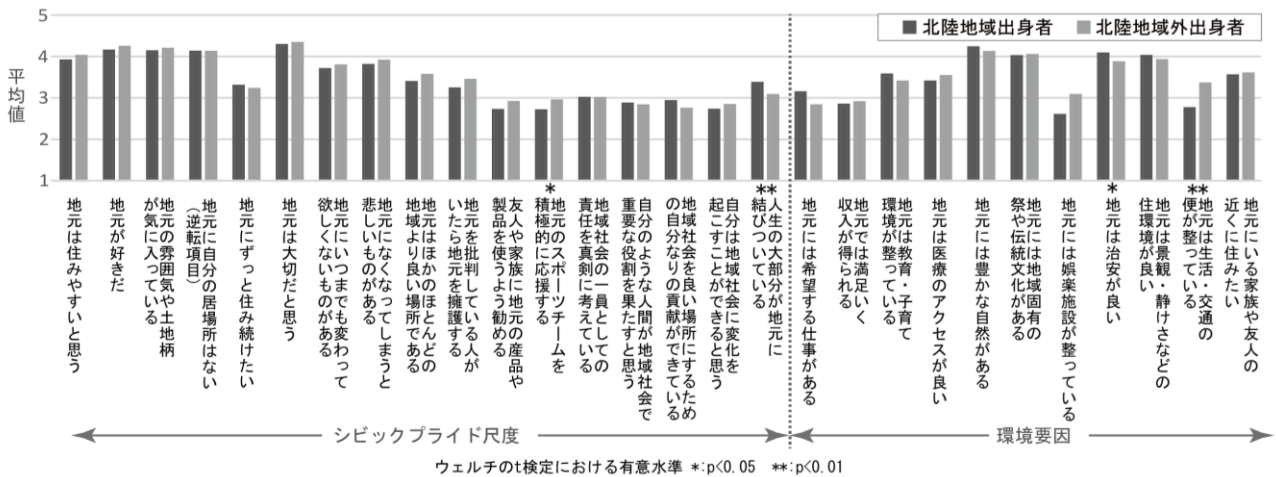


図3 出身地域とシビックプライド尺度・環境要因との関係

ームを応援できる環境があることも影響していると推察される。「地元は治安が良い」に有意差が見られたことも、各地元の都市化の度合いが影響している可能性がある。

#### 4.4. 出身都市圏とシビックプライド・環境要因との関係

出身都市圏とシビックプライドおよび環境要因との関係を明らかにするために、出身都市圏別のシビックプライド尺度と環境要因の平均値を算出し、その差を見るためにウェルチのt検定(有意水準  $p < 0.05$ )を行った。その結果を図4に示した。「地元は生活・交通の便が整っている」の項目は三大都市圏出身者の平均値が有意に高い。地方都市に比べ三大都市圏は生活利便施設や公共交通機関が整備されていることが大学生の地元に対する意識に影響していると考えられる。一方、「地域社会を良い場所にするための自分なりの貢献ができています」、「人生の大部分が地元に関わっている」、「地元には豊かな自然がある」の項目は地方都市出身者の平均値が有意に高い。地方都市の方が自然豊かで、地域社会と関わる機会が多いことが推察され、そのことが地元との結びつきの意識を醸成していると考えられる。

### 5. Uターン意向に影響を与える要因分析

#### 5.1. シビックプライドと環境要因のUターン意向への影響

ランダムフォレストによりUターン意向形成にシビックプライドと環境要因の各項目がどれくらい影響している

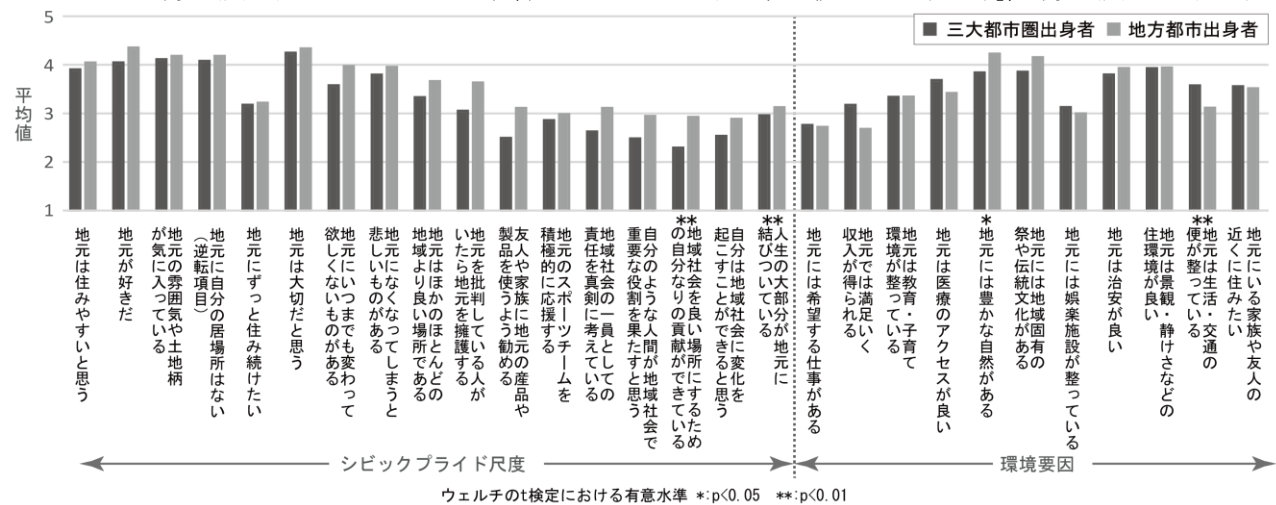


図4 出身都市圏とシビックプライド尺度・環境要因との関係

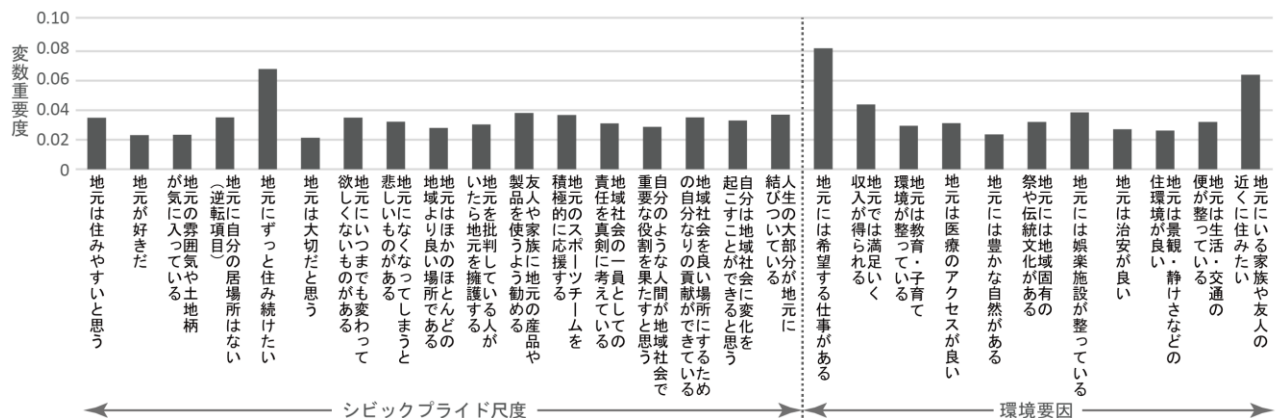


図5 大学生におけるUターン意向形成の変数重要度

かを明らかにした。説明変数はシビックプライド尺度の17項目と環境要因に対する意識の11項目とし、目的変数はUターン意向とする。図5に大学生のUターン意向形成の変数重要度を示した。なお、図2のクロス集計においてUターン意向との間で有意な傾向が見られた、学年、出身地域においては、それらの違いによるUターン意向とシビックプライド及び環境要因の関係の差異を分析する。なお、本章における括弧内の数値は変数重要度である。

Uターン意向形成において最も影響度の高い項目は、環境要因の「地元には希望する仕事がある(0.082)」であり、次に、シビックプライドの「地元に住み続けたい(0.068)」,そして、環境要因の「地元にいる家族や友人の近くに住みたい(0.064)」と続いた。これら3つの項目が他との比較し顕著に高く、シビックプライドと環境要因の両方の項目がUターン意向形成に影響している結果となった。

#### 5.2. 学年ごとの要因分析

次に、学年ごとにランダムフォレストを行い、Uターン意向形成にシビックプライドと環境要因のどの変数がどれくらい影響しているかを各学年で比較した。図6に学年ごとのランダムフォレストの結果を示した。

学部1年生は環境要因の「地元には希望する仕事がある(0.070)」の変数重要度が最も大きく、シビックプライドの「地元に住み続けたい(0.068)」,環境要因の「地元は医療

のアクセスが良い (0.065)」と続いた。他の学年と比較すると、「地元が好きだ (0.045)」「地元の雰囲気や土地柄が気に入っている (0.055)」などの愛着が高い傾向があった。

学部2年生はシビックプライドの「地元に住み続けたい (0.081)」の変数重要度が最も大きく、環境要因の「地元にいる家族や友人の近くに住みたい (0.078)」, 環境要因の「地元は教育・子育て環境が整っている (0.047)」と続いた。地元や家族・友人への愛着の影響が高いことが伺える。

学部3年生は環境要因の「地元には希望する仕事がある (0.090)」の変数重要度が最も大きく、環境要因の「地元にいる家族や友人の近くに住みたい (0.082)」, シビックプライドの「地元に住み続けたい (0.077)」と続いた。学部1, 2年生と比較し、希望する仕事の影響が最も高くなることが特徴である。

学部4年生は、環境要因の「地元には希望する仕事がある (0.119)」の変数重要度が最も大きく、環境要因の「地元にいる家族や友人の近くに住みたい (0.072)」, シビックプライドの「地元に住み続けたい (0.055)」と続いた。希望する仕事の影響が他の学年と比較しより顕著に高く、また家

族・友人の影響が高く、地元への愛着に関する項目が学部1年生と比較し低い点が学部3年生と同じ傾向を有する。

修士1・2年ではシビックプライドの「自分は地域社会に変化を起こすことができると思う (0.062)」の変数重要度が最も大きく、環境要因の「地元には希望する仕事がある (0.060)」, 「地域社会を良い場所にするための自分なりの貢献ができています (0.060)」と続いた。希望する仕事の影響が他の学年と比較しより顕著に高く、また家族・友人の影響が高く、地元への愛着に関する項目が学部1年生と比較し低い点が学部3年生と同じ傾向を有する。

学年間の変数重要度の推移をみると、地元には希望する仕事があることは、学年が上がるに従い変数重要度が高くなる傾向にあり、一方で、地元に住み続けたいという意識は学年が上がるに従い変数重要度が低くなる傾向にあることが分かった。これは、学年が上がるに伴い、キャリア教育や就職活動により職業観が形成され、地元への意識よりも仕事の内容が U ターン意向に影響していると考えられる。一方、修士学生は、地域社会との結びつきと、希望する仕事があることが U ターン意向形成に影

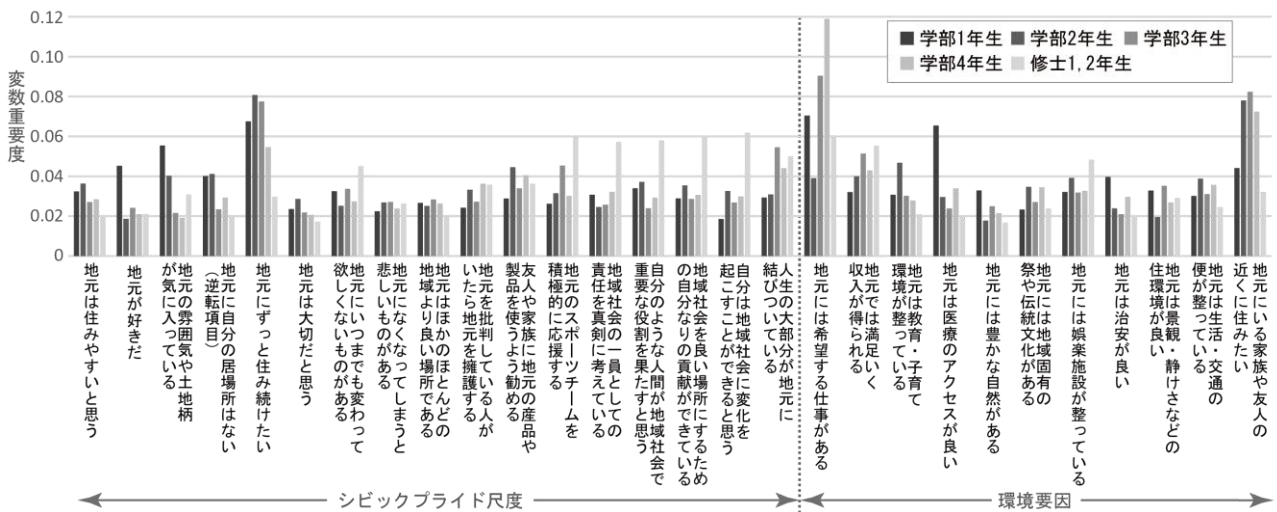


図6 学年ごとのUターン意向形成の変数重要度

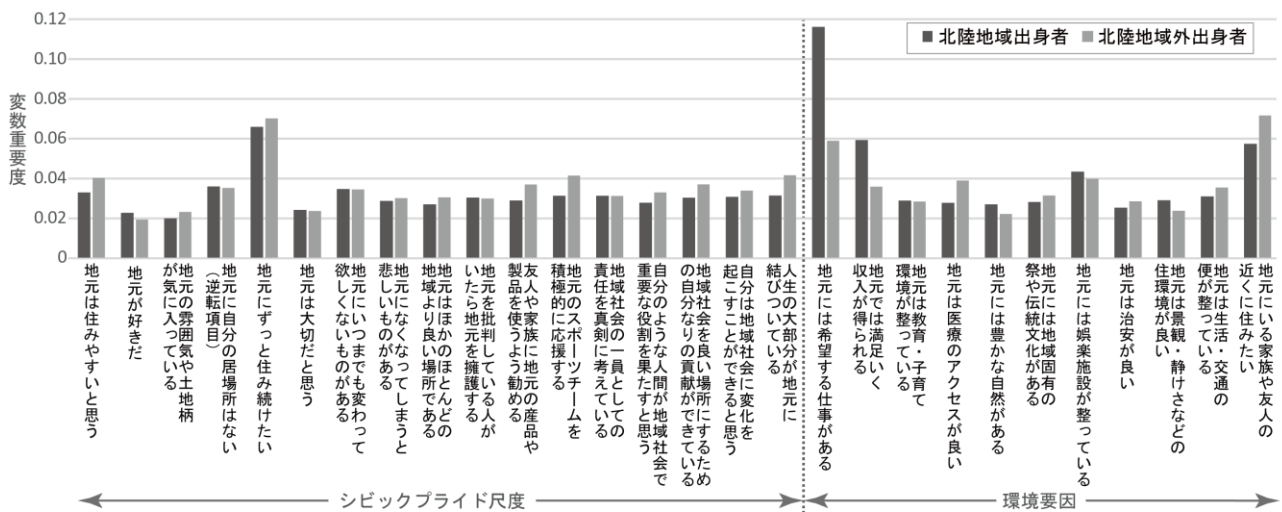


図7 出身地域ごとのUターン意向形成の変数重要度

響を与える。これは、一定の専門的知識や能力を修得することで、地元における自身の役割や貢献できる姿を想像することが可能となり、そのことがUターン意向を形成していることが推察される。

### 5.3. 出身地域ごとの要因分析

次に、シビックプライドと環境要因がUターン意向にどのように影響するかを出身地域ごとに比較した。図7に出身地域ごとのランダムフォレストの結果を示した。北陸地域出身者（福井県、石川県、富山県）と北陸地域外出身者にデータを分割し、分析を行った。

北陸地域出身者において変数重要度が最も高い項目は、環境要因の「地元には希望する仕事がある(0.116)」であり、シビックプライドの「地元に住み続けたい(0.066)」、環境要因の「地元では満足いく収入が得られる(0.059)」と続いた。それに対し、北陸地域外出身者において最も変数重要度が高い項目は環境要因の「地元にいる家族や友人の近くに住みたい(0.071)」であり、シビックプライドの「地元に住み続けたい(0.070)」、環境要因の「地元には希望する仕事がある(0.059)」と続いた。北陸地域出身者は地元希望する仕事があることがUターン意向に最も影響しているのに対し、北陸地域外出身者は地元や家族・友人の近くに住みたいという意識が最も影響しており、出身地域による要因の優先度の違いが明らかとなった。

## 6. 総合考察

これまでの分析結果を総合的に考察する。Uターン意向の形成には、地元希望する仕事があること、地元でずっと住み続けたいという意識、地元にいる友人・家族の存在の影響が特に高い結果となった。学年ごとの分析結果より、学年によってUターン意向形成要因が異なることが明らかになった。学部3・4年生といった高学年においては、地元希望する仕事があるという意識の影響が高く、学部1・2年生といった低学年においては、地元に住み続けたいというシビックプライドの意識の影響が高い結果となった。したがって、地元希望する仕事を充実させること、その周知を行うといった施策に優先的に取り組むことにより、大学生全体、特に高学年のUターン意向を高めることが考えられる。また、地元の魅力を知り、愛着を高めるための施策に優先的に取り組むことにより、低学年のUターン意向を高めることができると考えた。なお、大学入学と同時に地元を離れる大学生が多いため、大学入学前までに地元へのシビックプライドを醸成することも重要であると考えられる。例えば、森ら<sup>13)</sup>は高校生においては地域の祭りや地域教育などがシビックプライドを高めるとしており、そのような地域の魅力を知り、愛着を高校時代に高めることが将来的に大学卒業時のUターン意向を高めると考えられる。

Uターン意向と学年のクロス集計の結果より、学部3年生以下はUターン意向が比較的高く、学部4年生以上はUターン意向が低い傾向を明らかにした。Uターン意向形成

に対して、学年が低いと愛着の影響度は高いが、学年があがるにつれて、愛着の影響が低くなり、希望する仕事の有無の影響が高くなる。これは、就職時期が近づくことによる職業観の形成に伴い、地元への思いよりも仕事の内容が居住地選択において重要な要素となることを示唆している。これらより、大学進学時は地元に住みたいという思いが強く、Uターン意向が高い大学生は、学年が上がるに従い自身の希望する仕事と地元で可能な仕事とのギャップを認識し、Uターン意向が低くなっていることが推察される。

杉山<sup>22)</sup>は、地方大学に在学する大学生を対象にしたアンケート調査により、複雑で実力が試されるような仕事を志望する、あるいは上位の職階を希望する大学生のUターン意向が低いことを明らかにしている。したがって、上昇志向がある大学生が就職したいと思える会社や魅力的に思う企業、実力を求められるような仕事を増やしていくことがUターン意向の形成に重要である。

本アンケート調査を行う約2週間前の2022年10月1日時点で、2023年に卒業予定の大学生の内、就職先が確定している割合は87.1%である<sup>23)</sup>。つまり、10月時点の大学生の多くは進路が確定している状態であることから、本アンケート調査で得られた大学4年生のUターン意向の形成要因は、大学卒業時のUターン決定要因であることが推察された。学年ごとのランダムフォレストの結果より、学部4年生のUターン決定の要因として、第1に環境要因の地元には希望する仕事があること、第2に環境要因の地元にいる家族や友人の近くに住むこと、第3にシビックプライドの地元でずっと住み続けたいという思いが重要である。Uターン決定の際に、希望する仕事の有無や家族の存在だけでなく、地元に住み続けたいというシビックプライドが複合的に影響していることは既往研究では明らかにされなかった新たな知見である。

出身地域ごとのランダムフォレストの結果より、Uターン意向形成には、北陸地域出身者は地元希望する仕事があることが最も影響し、北陸地域外出身者は地元の家族や友人の存在が影響していることを明らかにした。北陸地域出身者は大学と地元が近いことで地元の企業に関する情報が多く得られるため、地元希望する仕事があることがUターン意向形成に影響していると考えられる。一方、北陸地域外出身者が得られる地元の企業に関する情報が少ないとすると、地域外に進学した大学生に地元の企業情報を伝えることが施策として有効であると考えられる。また、北陸地域外出身者は大学進学時に地元や親と離れて生活することにより、地元の良さや親のありがたさを感じるようになったことが推察され、そのような地元への心理的意識や人間関係がUターン意向形成に影響していると考えられる。

## 7. おわりに

本研究では、金沢工業大学に在学する大学生を対象にアンケート調査を実施し、大学生の地元へのシビックプライドと環境要因がUターン意向の形成にどのような影響が

あるかを明らかにした。

まず、大学生のUターン意向形成には、第1に地元を希望する仕事があること、第2に地元に住み続けたいという意識、第3に地元にいる家族や友人の近くに住みたいという意識が影響し、大学生のUターン意向形成には環境要因とシビックプライドが複合的に影響していることを明らかにした。

次に、学年に着目すると、Uターン意向は全体として、高学年よりも低学年の方のUターン意向が比較的高い傾向が見られた。Uターン意向の形成要因については、学年が低いと地元への愛着の影響が高いが、学年があがるにつれて、愛着の影響が低くなり、希望する仕事の有無の影響が高くなる。これは、学年があがるにつれて職業観が形成され、地元への心理的要因よりも仕事の内容といった環境要因の影響が強くなることを示唆している。さらに、一定の専門的知識や能力を修得した修士1・2年生では、地元における自身の役割や貢献できる姿をイメージすることが可能となり、そのことがUターン意向を形成していることが推察された。したがって、高学年では希望する仕事を充実させることやその周知を行う施策、低学年では、地元の魅力を知り、愛着を高めるための施策に優先的に取り組むことでUターン意向を高められると考えた。

さらに、出身地域に着目すると、北陸地域の出身者は地元を希望する仕事があることがUターン意向に影響し、北陸地域外出身者は地元の家族や友人の存在が影響していることが明らかになった。これは地元の企業情報の得られやすさや、親元を離れることによる親のありがたみを再認識することが影響している可能性がある。

以上の成果は、大学生のUターンを促進させるための施策を年齢や出身地域ごとに検討する上で有用な知見となり得る。特に、本研究は北陸地域にある理工系学部で構成された大学に在学する大学生を対象としているため、そのような母集団をターゲットとしてUターン施策を検討する上で、一定の意義を有すると考えられる。一方、他地域や文系学部にも所属する大学生においても同様の結果が得られるかは定かではなく、他地域や総合大学を対象としたさらなる調査検証が必要である。

#### 【補注】

- (1) 「地方都市」とは三大都市圏以外の都道府県を指す。
- (2) Uターンの定義は、生まれ育った故郷から進学や就職を機に都会へ移住した後、再び生まれ育った故郷に移住することである(24)。
- (3) 三重県伊賀市(25)や東京都羽村市(26)をはじめとした複数の自治体のシティプロモーション指針においてシビックプライドの醸成がUターンに影響するとされている。
- (4) アンケートは株式会社CirKitに依頼し、金沢工業大学の学生に配信した。
- (5) 「三大都市圏」とは国土交通省(27)により、東京圏(東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県)、名古屋圏(愛知県・岐阜県・三重県)、大阪圏(大阪府・兵庫県・京都府・奈良県)と定義されている。

#### 【参考文献】

- 1) 内閣官房, まち・ひと・しごと創生長期ビジョン(令和元年改訂版), <https://www.chisou.go.jp/sousei/info/pdf/r1-12-20-vision.pdf>, 最終閲覧日 2023.1.22
- 2) 内閣官房, 第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」, <https://www.chisou.go.jp/sousei/info/pdf/r1-12-20-senyaku.pdf>, 最終閲覧日 2023.4.24
- 3) まち・ひと・しごと創生本部事務局(2017), 地方創生インターンシップ事業等について, [https://www.chisou.go.jp/sousei/meeting/tiho-usousei\\_setumeikai/h29-01-17-siryu14.pdf](https://www.chisou.go.jp/sousei/meeting/tiho-usousei_setumeikai/h29-01-17-siryu14.pdf), 最終閲覧日 2023.4.24
- 4) 独立行政法人労働政策研究・研修機構, JILPT調査シリーズNo.152「Uターンへの促進・支援と地方の活性化」, <https://www.jil.go.jp/institute/research/2016/documents/152.pdf>, 最終閲覧日 2023.4.24
- 5) 伊藤香織(監修), 紫牟田伸子(監修), シビックプライド研究会(編集)(2015), シビックプライド2[国内編]:都市と市民の関わりをデザインする, 宣伝会議。
- 6) 伊藤香織(2021), 都市環境のよみにシビックプライドを高めるか-今治市を事例とした実証分析-, 都市計画論文集, Vol.52, No.3, pp.1268-1275
- 7) 小浜駿, 和田小英子(2019), Uターンを規定する社会心理学的要因(2)-大学生4群を対象とした比較分析-, 宇都宮共和大学シティアイフ学論叢, Vol.20, pp.93-107
- 8) 齋藤嘉克, 佐藤宏亮(2019), 若年層のUターンを促進する要因とその形成プロセスに関する研究-奄美大島龍郷町秋名・幾里集落を対象として-, 都市計画論文集, Vol.54, No.3
- 9) 岡崎京子, 後藤春彦, 山崎義人(2004), Uターン者増加の過程における転入要因の変遷-宮崎県西米良村を事例として-, 都市計画論文集, No.39-3, pp.25-30
- 10) 林拓也(2002)「地域間移動と地位達成」原純輔編『流動化と社会格差』ミネルヴァ書房, pp.118-144
- 11) 江崎雄台, 荒井良雄, 川口太郎(2000), 地方圏出身者の選流移動-長野県および宮崎県出身者の事例, 人文地理, Vol.52, No.2, pp.80-93
- 12) 伊藤香織(2019), シビックプライドの源泉としての都市環境及び諸要素-富山市中心市街地と富山地域を事例として-, 都市計画論文集, Vol.54, No.3, pp.615-622
- 13) 森 豪大, 藪谷 祐介, 宋 俊煥(2022), 高校生のシビックプライドの醸成要因と将来の定住意識に与える影響-富山県高岡市に居住する高校生を対象として-, 都市計画論文集, Vol.57, No.3, pp.933-940
- 14) 日高未希恵, 今井秀樹(2021), 中山間地域に暮らす人々の Civic Pride に関連する要因-地域の文化的価値観に着目した看護への示唆-, 日本看護学会誌, Vol.41, pp.806-814
- 15) 井形康太郎, 田中尚人(2019), 地域学習における児童のシビックプライド形成に関する研究, 土木学会論文集, Vol.75, No.5, I, 181-I-189
- 16) 金沢工業大学: 大学概要 学生数, [https://www.kanazawa-it.ac.jp/about\\_kit/gakuseisuu.html](https://www.kanazawa-it.ac.jp/about_kit/gakuseisuu.html), 最終閲覧日 2023.4.24
- 17) 村上竜馬, 原千恵子, 三好一英(2015) 大学生のアイデンティティと職業選択の年次変化-アンケート調査結果の分析-, 東京福祉大学・大学院紀要, Vol.6, No.1, pp.39-46
- 18) 谷垣雅之(2018), 消滅可能性自治体への移住者誘因に関する定量分析, 農村計画学会誌, Vol.36, No.4, pp.554-561
- 19) James Carifio, Rocco Perla (2008) Resolving the 50-year debate around using and misusing Likert scales, Medical Education, Vol.42, No.12, pp.1150-1152
- 20) 江崎雄台(2007), 地方圏出身者のUターン移動, 人口問題研究, Vol.2, No.2, pp.1-pp.13
- 21) 木村宏人(2020), 地元のプロ・スポーツチームを応援する住民が持つ地域愛着-地域的愛着と拡大意識に着目して-, 年報社会学論集, Vol.33, pp.109-pp.120
- 22) 杉山成(2012), 大学生における地元志向意識とキャリア形成, 小樽商科大学人文研究, Vol.123, pp.123-140
- 23) 株式会社リクルート(2023), 就職プロセス調査(2023年卒)「2023年3月度(卒業時点)内定状況」, [https://shushokumirai.recruit.co.jp/wp-content/uploads/2023/03/naitei\\_23s-20230327.pdf](https://shushokumirai.recruit.co.jp/wp-content/uploads/2023/03/naitei_23s-20230327.pdf), 最終閲覧日 2023.4.17
- 24) 総務省地域力創造グループ過疎対策室, 「田園回帰」に関する調査研究報告書, [https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000538258.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000538258.pdf), 最終閲覧日 2023.4.24
- 25) 伊賀市(2017), 伊賀市シティプロモーション指針, <https://www.city.iga.lg.jp/cmsfiles/contents/0000004/4654/sankou2.pdf>, 最終閲覧日 2023.4.24
- 26) 羽村市(2022), 羽村市シティプロモーション基本方針, <https://www.city.hamura.tokyo.jp/cmsfiles/contents/0000009/9868/kaiteiban.pdf>, 最終閲覧日 2023.4.24
- 27) 国土交通省, 用途・圏域等の用語の定義, <https://www.mlit.go.jp/totiken/sangyo/H30kouji05.html>, 最終閲覧日 2023.4.24